
兄の隠し事

沙羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

兄の隠し事

【Nコード】

N3646Y

【作者名】

沙羅

【あらすじ】

お兄ちゃんは何か隠している。おおよそ想像はついている。彼女に振られたのだ。でも、お兄ちゃんは夜な夜な彼女に会いに行くと行って外出する。私は後をつけてみることにした。

お兄ちゃんは隠し事をしている。

よく、彼女の夕子さんを家に招いていたのに、最近全く夕子さんは来ない。お兄ちゃんは夕子さんの話をするともなくなった。「夕子さん、最近何でうちに来ないの？」と訊くと、お兄ちゃんは「忙しいんだよ」と答えるが、それは嘘だ。私の予想では、振られたのだ。振ったのなら隠す必要はないはず。私はお兄ちゃん大好きっ子でありながらも、夕子さんと幸せになってほしいと思っていた。だって、夕子さんはとても優しい人なのだ。

「夕子さん、そのストラップ可愛いね」

と言うと、

「じゃあ、あげるね」

と言ってプレゼントしてくれるし、一緒に服屋に行くと何でも好きな服を買ってくれる。この人にならお兄ちゃんをあげてもいいと思った。

お兄ちゃんが私の部屋に来た。

「亜子」

「何？」

「その……あいつのことは、もう吹っ切れたか」

「無理だよ」

私は笑った。

「私、あの人が好きなんだもん」

「片想いだっただし、あいつ行方不明なんだろう？ もう諦めろよ」

「諦められないよ。私は、あの人と一緒にいたい」

「……そうか」

私は、最近酷い失恋をしていた。でも、諦める気持ちは更々なかった。お兄ちゃんたちのようにはなりたくない。

「雅樹、最近夕子さんとは上手くいっているのか？」

食事中、お父さんが訊いた。

「うん、上手くいってるよ」

どうしてお兄ちゃんは嘘を吐くのだろう。やっぱり、振られたなんて格好悪いからだろうか。別に、自分から振ったとも言えはいことなのに。お兄ちゃんはちよつと真面目すぎる。

「ねえ、あなた最近夜遊びが多くない？ まさか悪い友達でもいるんじゃないでしょうね」

と、お母さんが眉をひそめながら言った。

「違うよ、夕子だよ。夕子、最近忙しくて夜しか会えないんだよ」

「夕子ちゃんと会ってるならいいけど……」

本当に、お兄ちゃんは夕子さんと会っているのだろうか。私はお兄ちゃんのあとをつけてみようと思った。

夜、お兄ちゃんは出かけていった。こっそり、尾行する。ここは田舎なので、人通りは少ない。お兄ちゃんは森に入ってしまった。普通、こんなところで待ち合わせはしない。ということは、悪い友達か。お兄ちゃんまで不良になったらどうしようと不安になった。これは、本人に言うしかない。と、お兄ちゃんは突然変な行動に移った。近くに落ちていたスコップを広い、穴を掘り始めたのだ。タイムカプセルでも埋めてあるのか？ ざくざくと掘り続けるお兄ちゃんの後ろ姿をじつと見つめていた。しばらくして、土の中から棒のようなものが顔を覗かせた。さらに掘り進めるうちにそれが何か分かったとき、私は悲鳴を上げそうになった。

人が、埋まっていた。

棒ではなくて、足だった。私はふらつき、足元に落ちている枝を踏んでしまった。パキン、という音が辺りに響いた。

お兄ちゃんが、ゆっくりと、後ろを向いた。

「あ……」

お兄ちゃんは能面のような顔で私をまっすぐ見ていた。そして、

スコープを持ったままこちらへ近付いてきた。殺される、そう思った。でも恐怖で身体が動かない。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんがやったの？」

風で草木が揺れる。町の灯りは遠く、大声を出しても誰の耳にも届かないだろう。

「……ああ……」

「どうして……どうしてよ」

「亜子、ごめんな」

「……誰を、殺したの？」

訊かなくても分かっていた。

そのとき、後ろで枝を踏む音がした。振り返ると同時に、頭に強い衝撃を感じ、私はその場に倒れた。それでもまだ私の頭を石で殴る誰か。何度も、何度も、何度も。中身がはじけて血潮が噴き出した感触。それでもなお誰かは殴り続けた。

意識 薄れてゆく

「……亜子は？」

お兄ちゃんの声 が

かすかに耳に 届く

「もう、死んでるんじゃない？」

この声

知ってる

「ありがとな」

え

どういう こと

「お前にばかり殺させて悪いな」

「度胸なし」

「これで、こいつと亜子は結ばれる」

もしかして 埋まっていた死体は 私の 私の 私の

「一緒の場所で、眠らせてやろう」

そして 私は土の中

隣には あの人

「亜子、さよならだ」

「バイバイ、亜子ちゃん」

私は これでよかったと思っている

好きな人と一緒にいられるから？

ううん 違う

お兄ちゃんが 夕子さんと仲良しなままだったから

さよならだ

久しぶりに新作を。怖くなくてすみません＞＜最後の方はありがたい文章の書き方になってしまいました。私ってホラー向いていないんじゃないかと度々思いますW読んで下さった方、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3646y/>

兄の隠し事

2011年11月9日03時12分発行